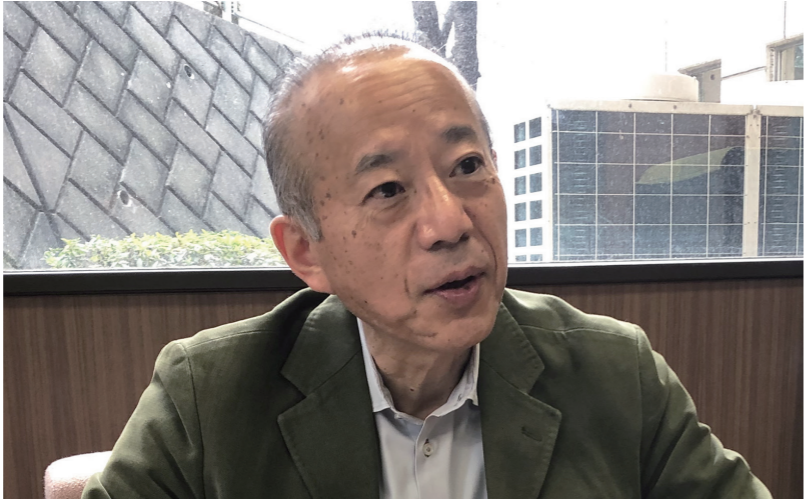


富山 省吾

(地下鉄延伸期成同盟会 副会長)



私と新百合ヶ丘とのご縁

私のかつての勤め先は、成城学園にある映画会社東宝の撮影所でした。その撮影所のVIP、私のボスである林芳信東宝副社長や特撮の川北紘一特技監督が新百合ヶ丘にお住まいだったので、1980年代後半から新百合ヶ丘には良く来ていました。新しい駅を見た時には、SFの未来都市ができたという感じで、とても映画的な街だなあと好印象を持ちました。

新百合ヶ丘に大学を構えて

東宝関係の映画スタッフは祖師ヶ谷大蔵あたりから狛江、登戸、生田、そして百合ヶ丘と、小田急線沿線にたくさん暮らしていました。さらに、岡本喜八監督が生涯生田に暮らされていたり、映画評論家の白井佳夫さんも沿線ですし、多くの映画人がこの界隈にお住まいでした。

また昔から生田オープンと言って東宝のオープンセット撮影に使われた地域や、東映や日本テレビのスタジオなど、向ヶ丘遊園からこっちには映画やテレビの撮影に使われた施設がたくさんありました。

地下鉄延伸を機会とする新しいまちづくり

地下鉄延伸については、新百合ヶ丘という街の可能性を最大化するよい機会になると思いますし、ここに暮らす人たちにとっては「逃してはいけない」チャンスです。アクセスがよくなるこの機に、新百合ヶ丘を再開発して、街そのものを新しく作り出す絶好の好機だと思います。

私の知り合いの北谷賢司さんの本「エンタメの未来2031」を読んでいると、エンタテインメント・シティという言葉が出てきます。街の真ん中に巨大なアリーナがあって、それを囲んでシネコンやホテルができて、その周りに企業が集まって、さらにその外で住宅を分譲する。実際に世界中で建設されてきたそうですが、日本ではまさに新百合ヶ丘がそうだと思うんですね。緑や住宅地に加えて、複数の劇場・ホール・シネ

その後、日本映画大学の佐々木史朗前理事長から、大学と映画業界のつながりを強化していきたいので映画会社出身の私に理事長のバトンを渡したいと声をかけられました。映画づくりと一緒に仕事をしていた仲間には、大学の前身の専門学校時代の卒業生たちがたくさんいたことから、学校への親近感と感謝の気持ちを強く持っていたので、お役に立ちたいと思って新百合ヶ丘に伺うようになりました。

日本映画大学は、専門学校時代の横浜の駅前から新百合ヶ丘に移転してきましたが、沿線に撮影所があって映画スタッフがたくさん暮らしている、周辺地域が実際の撮影にも使われているという、映画の匂いが伝わる良い環境だったと思います。

郊外にどんどん大学が出て行く時代に、新百合ヶ丘は都心から程よい近さで、学生たちにとっては通学がしやすく利便性が高かったのではないかなとも思います。

コンは既にあります。ですから新しく必要なのは街の中心核となるエンタテインメントやアートを中心とした、サイズ感のある、大きくてシンボリックな複合施設です。

2~3000人収容の大ホールを中心に演劇やライブ公演ができる複数の劇場、さらには個性的な展示で海外を含めて来場者を期待できるミュージアムや展示会場などを組み合わせ、多目的のエンタテインメント建造物。これを再開発される地域の中心に建築して、新百合ヶ丘の街としてのルック、外観を一新すべきだと思います。この中心核の中にはニューメディアや新規イノベーションの展示を行うラボ施設とそれを提供する企業群も誘致したいですね。

富山省吾 PROFILE

とみやま・しょうご……日本映画大学理事長。1952年、東京都出身。東宝宣伝部に所属後、83年に東宝映画の企画部に移動。『ゴジラvsビオランテ』(89年)で製作の田中友幸を補佐する。以後、『ゴジラ FINAL WARS』(04年)までの12本のゴジラ映画の企画製作を担当。そのほかの主な作品は「恋する女たち」「誘拐」「赤い月」など。第4代東宝映画社長。城戸賞、芸術選奨、毎日映画コンクール選考委員、文化審議会委員、映画制作適正化機関審議委員。著作「ゴジラのマネジメント」。

エンタテインメント・シティに求められるもの

DX(デジタルトランスフォーメーション)とコロナ禍というふたつの要因で、スマート化というのが急速に進んできた中で、これからの演劇や音楽、あるいは映画はどうなっていくだろうと考えています。配信についても個人に届くだけではなく、逆にホールや劇場で大人数で一緒に見るというヴァーチャル・コンサートが増えて来ています。高速通信と映像・音響設備を全て取り込んだスマート・ホール、スマート・シアターが誕生して、一つのコンサートがライブとヴァーチャルそれぞれの楽しみ方を提供する、マルチユースの新しい可能性も出て来た。世界ではそういうことがどんどん進められているのに、日本では歩みが遅いと感じますので、新百合ヶ丘では後れを取らずに最先端を目指したい。ですから街の中心核の建造物のスマート化は必須です。新百合ヶ丘の中心にそういう多目的なホールを作ることで、街の核、コアが実際に見えて来ます。

観客が最終的に求めるものがライブの魅力だ、ということは変わらないと思います。ヴァーチャル空間、メタ空間の楽しみというのはむしろ

日本映画大学も変わっていく

アートは基本的に年齢とは関係ありません。今日では、むしろ若い世代の方がデジタルを取り入れた新しいアーティストとしての可能性を作り出しています。そういう時代では大学生というのは、一番突出した表現者となる可能性があると思うんですね。映画大学では130年の映画の歴史の中の技能や思考法を大切に教えていますが、それらを身に着けたうえで、現代のデジタル技術を使って、映画映像制作・ニューメディア・アートに向かって飛び立っていく若者たちがどんどん出てくるという予感がします。

新しい街づくりに向けて期成同盟会が果たす役割

地下鉄ができるまでにあと8年あると考えるのか8年しかないと考えるのかというと、やはり時間はないと思います。コロナがいろいろなものを止める、あるいは停滞させるという状況が出てきて、地下鉄延伸も遅れる危険性を持つということになると、期成同盟会の役割が大きくなって来たと頼もしく感じますし、自分もその一員として頑張らなければと思います。

地域の活性化に向けた計画のスタートラインにあるのは、血流としての交通だと思います。地下鉄が通らないと次のことが始まらない。川崎市にはそこに着目していただいて、新百合ヶ丘だけではなく10年、20年、30年先の川崎市のための最優先課題だという意識をもって進めていただきたいですね。

街づくりというのは壮大なプロジェクトですから、まず目標を見定めなければなりません。エンタテインメント・シティに向かうという考え方はひとつのご提案ですが、別の考え方もあると思います。ですから方向を定めると言っても、1年や2年では決まらないと思います。でも3年で決めないとその後の具体化するプランニング時間を持てませんし、建設着手時期もさらに先になってしまいます。ですから、新しい街の姿というものをイメージして、言葉とデザインにして一致させていくという作業はできるだけ早くやり切る必要があります。

これからの時代の街に必要なことは、生活の中で1人ひとりが満足できる時間と場所を提供することだと強く感じています。映画や音楽、演劇などのアートとエンタテインメントの力を核・コアにして、そこに時代

る日常的になって、ハレの舞台がライブになる。だから大きなライブホールが欲しい、というところにたどり着くのです。

新百合ヶ丘の街の特徴として駅前にある2つの芸術系大学が上げられます。昭和音楽大学と日本映画大学です。この2つの教育機関と企業の先端研究所が連携して新しい表現を開発し、実際に作品として提供できたら面白いと思うんです。ラボと大学が一緒になって創作をおこない、その作品を見て楽しむ。教育と研究が融和した先端娯楽も楽しめる街にできたらと考えています。

10年後、神奈川県の新たな交通結節点となる新百合ヶ丘には日本中、世界中から多くの人の流れが押し寄せます。結節点を通過点ではなく多様な娯楽を楽しめる街にしたい。

エンタテインメント・シティ新百合ヶ丘は、エンタテインメントとイノベーション、そしてニューメディアが融和一体化した街を目指します。これは実現可能な未来像だと信じています。

近い将来、メタバースとか仮想空間の中で映像表現によって収入を得る若い人たちが出てくる。それは、映画という表現に留まらない、映像エンタテインメント・映像アートの世界です。その時に映画130年の歴史から学ぶことが実はふんだんにあるんです。学生たちが既存の創作物、映画やオペラなどから学ぶことがニューメディア・エンタテインメントへの道を拓く。これが昭和音大さんとウチが学生たちへ提供できる大きな財産、強い武器だと思っています。映画の力の活用方法、という意味では日本映画大学自体も時代と共に変わり始めています。

の先端の技術革新の魅力も取り入れて、新しい新百合ヶ丘の街を創出したいと思います。そこで暮らす人と働く人、学ぶ人、さらに外から訪れる人がみんなで豊かな暮らしを楽しめる街。

3年間でできるだけたくさんの皆さんの意見をまとめて前に進んでいくことができれば、この期成同盟会を作って良かったとみなさんに言って頂けるのでは、と思っています。

インタビュー：北條



日本映画大学 白山校舎